



千葉県 TEACCH プログラム研究会
2018 年 5 月 19 日(土) 第 95 号

「森」字・佐々木正美
イラスト・竹蓋伸六

発行：千葉県 TEACCH プログラム研究会広報部

ホームページ：<http://www5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm> 事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS 内 TEL :043-227-8557

新しい制度の趣旨を実現するためのスタッフの育成に向けて

千葉県 TEACCH プログラム研究会 代表 長澤隆壽

私事ですが学校現場を離れて十年が終わりました。現役最後の年度（H19）にちょうど特別支援教育制度がスタートしました。教育界においては教育制度の大改革と言っても過言ではないほどの出来事でした。そこに至る主たる要因は文科省の全国調査により、義務教育諸学校に在籍する発達障害のある子どもたちが増加しているという結果でした。

そのような中、今思えば学校経営者としてこの新しい制度を現場で活かしきれるか、大きな不安を抱かされたのが正直なところでした。その最大の要因は当時、発達障害のある子どもたちに対して障害特性に応じた適切な指導・支援のできる教職員が十分育っていなかったことが挙げられます。全国傾向と同じく私の学校でも発達障害のあると思われる子どもの在籍率が年々高まっていました。ですからトラブルも多発していました。おのずから教職員の研修は「発達障害の特性の理解」に特化して教職員一人一人の意識改革を促すことを急務としていました。

あれから十年間、幼児教育から大学教育に至るまですべての教育ステージでますます増加している発達障害のある人たちについて社会の関心は大きくなってきました。そして、この人たちを取り巻く制度もたくさん誕生してきています。教育界では、高等学校でも本年度より「通級による指導」が始まりました。千葉県では県立幕張総合高校と県立佐原高校の二校を皮切りにこの制度をスタートさせたそうです。

このように、これらの制度を活かして発達障害のある人たちの QOL を高めていくことが今後ますます求められてきます。同時にこれらの制度の実現性を高めるためのスタッフの育成も各界で計画されることと思います。千葉県 TEACCH プログラム研究会は、これらのスタッフを目指す人たち、また、育成を計画している組織に対し、いつでも役に立てられることを願っています。そのため本年度も国内で著名な講師をお招きした年間プログラムを用意できました。是非、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

最後に、藤崎初代代表の後、二代目代表として十年間務めて来ましたがこの度代表を辞任することになりました。長い間ご協力誠に有難うございました。

実践報告会

2018.2.25

今回のセミナーでは、まず施設の立場から村田悠氏、教育現場から小野塚早紀氏・野本有紀氏から実践報告をしてもらいました。

そして、最後には昨年6月に御逝去なされた佐々木正美先生への感謝を込めて、千葉県 TEACCH 研究会とのつながりの紹介と佐々木先生の歩みを追った「まなざし」を鑑賞しました。「自閉症の方の文化をどのように理解するか、その文化にどのように入り込んで行くか」を佐々木先生から教えて頂きました。「障害は相手も持っているものではなく、相手と私たちの間にあるものである」の言葉は忘れられません。また、自閉症のお子さんを育ててこられた自閉症協会の坂本さんよりコメントを頂きました。佐々木先生や奥様との出会いから「人に対する優しさ」が基本にあること、そして「優しさの中にある厳しさ、厳しさの中にある優しさ」、そういう子育てを目指しているという自閉症の子を育てる大先輩からの言葉がとても印象的でした。



「日中作業における視覚支援

～年長児教室の取り組み～

村田 悠 氏（社会福祉法人春濤会 八幡学園）

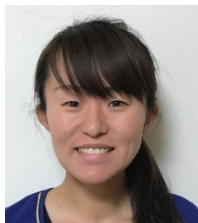
施設職員の立場から実践発表をして頂いた村田悠氏が勤める八幡学園は昭和3年に創設をしました。あの貼絵の天才、山下清さんが在園し才能を開花した施設でもあります。福祉型障害児入所施設であり、3歳から19歳の障害児が入所しています。事例のS君は、身辺処理は概ね自分でできますが、行動障害があり外出も男性2名の支援が必要な18歳（当時）で、衝動性が強く、指示待ち、先の見通しがもちにくい、余暇を過ごせないなどの特性がみられます。高等部を卒業したあと、八幡学園を卒園するまでの期間（移行期間が20歳の誕生日前日まで利用できる）の個別的プログラムを紹介して頂きました。

- 「Sさんを知ろう!」: 生育歴や学校からの引継ぎに加え、T-TAPを活用したフォーマルアセスメントの実施で、集中可能な時間や作業の量や本人の得意なことを生かした作業内容の検討、作業環境（苦手な友達への配慮）設定、趣味や余暇がないなどの情報を得る。
- 「アセスメントを踏まえて実践!」: ①作業面では、Sさんが得意とされる10分程度（2～3工程）の教材を数種類用意し、棚の上から下へと見てわかるように環境を整えたことで、自分でできるという達成感をもてるようにした。②活動場所では、あえて個室にするのではなく友達と机を向かい合わせた作業環境にし、苦手な友達との間には、パーテーションを設置した。③休憩場所は、他害があるためS君専用の休憩スペースを設定した。
- 「しかし・・・仮説から再構造化!」: ①できる内容でも作業の取りかかりが遅かったため、作業場所に移動する際に、最初の作業部品を渡すことで着席後すぐに取りかかることができた! ②パーテーションをしても苦手な友だを気にしているため、パーテーションを外し、Sさんから彼の後ろ姿が確認できる位置にしたことで、安心して作業に集中できるようになった! ③Sさん専用の休憩スペースへ行きたがらなかったため、（Sさんにとって休まる場所でないことと捉え）共同エリアで休憩をとったところ、休憩をみんなと過ごすことができた!

以上の実践から、Sさんが自主的に活動する姿や活動中の自傷や物損行動見られなくなった。そして関わり方のわからなかった職員も積極的にSさんに関わるできるようになり、職員との関係性も良くなっていった。

.....

まず実践する!ことでSさんに合わせた環境作りや支援を実践し、その結果から再構造化することでより、Sさん自身が安心して活動できる場面が増えていきました。Sさん自身が見通しをもち安心できたことや環境や支援を整えることで、周りの大人もSさんの見方が変わり、良い関わりができるようになりました。アセスメントや再構造化をしていくことは、Sさん自身の自閉症としての特性を理解し、支援していくことの大切さを改めて学ばせて頂きました。



千葉県立つくし特別支援学校での実践報告

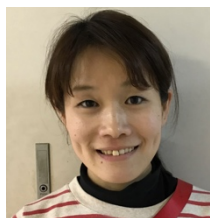
教員を対象とした夏季研修で行った「自立課題の研修」と小学部5から6年生時の事例を中心に実践報告をいただきました。

「自閉症の特性理解と自立課題の作成を通して」

教諭 小野塚 早紀 氏

平成29年度の夏季休業中に実際に自立課題を作成する研修をT研の運営スタッフの先生方に協力を頂き、東葛地域では初めて実施しました。中には、「自立課題」という言葉を初めて聞いたという先生もあり、若手からベテランまで幅広い経験年数の方が参加しました。午前中は閉症の特性理解について講義があり、なぜ自立課題が大切なのか、どういう視点で作成するのかなどの意味を学びました。小学部（低・高）、中学部、高等部の4グループを作り、それぞれの事例児童・生徒の情報をもとに自立課題の領域が重ならないように3人1組で教材の作成を行いました。

- 「教材はシンプルに！」左ら右、上から下など、見てすぐにわかる教材を！子どもが一人できることから課題を作成していくことが、人に依存せず、子供の達成感につながっていく。
- 「教材の見直し、再構造化！」実際に学習する形で一度行うことや作った人とは違う人が体験することで、作った人との意図とは違う捉え方や視点に気がつくことができた。表記の位置や課題の置き方など子どもの目線で行うことが大切であり、すでに一人でできる自立課題も延々で行うのではなく、変化をつけることも必要である。
- 「チームで作成！」一人で考えるのではなく、複数で行うことで色々な視点が出たり、やり方を統一したりすることができる。また、他学部の自立課題を見ることで生活年齢に配慮することや作業学習や日常生活場面での支援へも広がっていける。



「児童から考える生活・学級作り～Aさんの事例から～」

教諭 野本 有紀 氏

Aさんが5年生の時には、感覚過敏が強く、食べ物のこだわりも多くありました。着替えや下着の着脱時、暑いとき、何もすることがないときなど自傷や他害も見られましたが、Aさんは何が分かって何が分からないのか、学校生活で何が影響しているのか振り返りました。そのことで6年生の初めには問題行動は減り、学期末にはほぼ見られなくなりました。Aさんの感覚過敏や自傷だけに注目するのではなく、Aさんの良さや苦しさを日常生活に生かし、生活作りをしていきました。

- 「安心できる教室作り」①暑さが苦手であるため教室を常にキンキン！（18度設定）に冷やし、苦手な環境をなるべく作らないように設定した。②Aさんの強みを活かし、色を使った課題棚を設置し、自立課題を行ったことで、徐々に「終わりの理解」につながったり、片付けができるようになったりした。③おもちゃ棚に好きな感触のおもちゃを用意した。④棚の後ろなどAさんの好きな「すみっこ」を作り、リラックスできる場を設定した。この実践により苦手な活動にも取り組めるようになったり、物や場所を通して、友達や教師と適切な関わりができるようになったりした〈「できた」の実感〉。
- 「楽しみをもてる時間作り」（苦手な）着替えの後に楽しみな活動を設定した。また、楽しみな活動中も待つ場所を設定したりタイマーなど視覚支援を使ったりすることで、順番の理解や時間が長くなっても待てるようになった〈「楽しみ」だからやってみよう！〉。
- 「確かにつながる歌・言葉」Aさんの好きな歌「どんな色が好き！」などを交えて応答するやりとりを繰り返したことで、Aさんから自発的に歌ってくる様子が見られるようになった。他の場面でも言葉が出るようになり、保護者とも確認しながら本人の好きな遊びや活動をカードにし、言葉と共に伝えることで言葉の理解につながっていった。また、Aさんが苦手なことに取り組む際も、自分で言葉にしながら終わられるようになってきた。

以上の実践から、怒ったり、泣いたりしても自分で乗り越えられることが増え、自傷が減った！

.....

4月当初は棚の多いクラスだと思われていたそうですが、職員全体で研修を行ったことで、なぜ環境の設定や自立課題が必要なのかなどAさんに関わる、周りの職員が意図や必要性を理解できたことで、チームで支援することに繋がりました。また、中学部への進学に向けた1日体験での成功体験など、人や場所が変わっても安心して生活できるように、Aさんに関わる良き理解者の輪を広げる大切さを改めて、再確認することができました。

好評連載！

ティータイム



千葉県 TEACCH プログラム研究会 ディレクター 安倍陽子



温暖化の影響か、寒暖の差が激しく、季節が早まってきている感がありますが、ゴールデンウィークは如何お過ごしでしたか？楽しいことはあっという間に過ぎ去り、その後の落ち着いた日々の中で、いよいよ今週から平成 30 年度の T 研が始まります！

会員の皆さま、今回新しくお越しいただいた皆さま、ご参加を感謝申し上げます。

皆さま、ご存知のように昨年佐々木正美先生がご逝去されました。先生には、千葉の T 研を立ち上げる時からお世話になり、例年、総会後の講演会で繰り返しお話を伺うことから、セミナーを始めさせていただいていたのですが、これからは先生から学んだ教えを胸に、新しい歩みをしていくことになります。私たちの T 研は今年 17 年目に入りました。米国の TEACCH 部も新しいディレクターになり、変わってきたように、新たな時代へと変化していくことが求められています。

そのような中、今年度は、全国 TEACCH プログラム研究会会長である内山登紀夫先生のご講演から、このセミナーを開始致します。

さて、この“ティータイム”のコーナーは、千葉の T 研のことを中心に、個人的なことも書かせていただいています。今回は初回なので、今年度の T 研のプログラムのご紹介をさせていただきます。まずは、例年通り、5 回の講演会と実践発表会を行います。前半 2 回は基礎編として、ASD（自閉症スペクトラム）の人たちの特性理解と支援、及び TEACCH プログラムについて、繰り返し理解を深めます。後半秋から始まる 3 回は、実践・応用編として、ASD の人たちの保護者や支援者の方々から実際の支援を学びます。来年 2 月の最終回には、講演を聴いた方々からの実践発表をお聞き致します。

今年は、以前にもお話いただいたことがあるのですが、久しぶりに保護者の立場から 9 月に中井百合子氏を山梨県からお迎えし、お子さんの就労とアパートでの自立した生活のご様子を伺います。家の中の構造化をどうすればよいのか・・・と悩まれている方は必見です！10 月には、久々に幼児期の支援（幼児期と言っても、どの年齢の方にも参考になるかと思います）を、12 月には、これ又お久しぶりに梅永雄二氏をお迎えし、成人期の支援を学びたいと思います。

実践セミナーとして、6 月には、TEACCH の評価ツールを学ぶために、引き続き青年・成人向け TTAP 講習を中山清司氏にお願いしています。どのように評価をとるのか、そして得られた評価からどのような目標を作成するのか、その流れを学びたいと思います。

多彩なプログラムから新たに学び、日々の生活の中で、ASD 理解と支援にお役立ていただければ幸いに思います。

今年度は、T 研のスタッフにも新たな変化があります。

皆さま、今年度もどうぞよろしくお願い致します。

～平成 30 年度 TEACCH プログラム研究会 第 2 回セミナーのお知らせ～

期日：平成 30 年度 7 月 7 日（日）13：30～16：30（13：00 受付開始）

場所：千葉商工会議所 第 1 ホール（千葉市中央区中央 2-5-1 千葉中央ツインビル 2 号間 13 階）

演題：『特性に基づいた視覚支援』（仮題）

講師：諏訪 利明氏（川崎医療福祉大学医療福祉学部 准教授）

編集後記：昨年度は教育現場の立場で野本先生と合同の実践報告もさせていただき、大変貴重な経験をさせていただきました。本人の行動に「なぜ」と疑問をもち理由を考え、アプローチしていくことやチームで支援することの大切さを改めて感じました。佐々木先生のおっしゃっていた「無理解なのに熱心な人」になっていないかを常に立ち返り、セミナーでの学びを実践&発信し、仲間を増やしていきたいと思っています。（二階堂早紀）